

新潟縣第二區衆議院議員候補者略傳

市島謙吉君傳

君の家系は北陸第一の藩市島藩次郎氏に由り祖父市島藩學徳を以て...

旗野餘太郎君傳

君は北陸原野安田村の天寶實業に由り幼く才幹あり...

新潟新聞號外 明治廿七年二月十五日

専ら經濟學を研究し大に識見を著し君素と學者となり...

言行を極端厳密にして自ら率先して身を正すに務む...

君は幼く志氣不凡學問の門に入り新學學校の門に入り...

君は幼く志氣不凡學問の門に入り新學學校の門に入り...

發行所 新潟市醫學町通一番町五十二番戸

發行所 新潟新聞社

發行人兼印刷人 谷吉三郎

編輯人 石崎佐一郎

明治廿五年三月十日選印省認可



Vertical scale on the right edge of the page, marked from 1 to 67.



新瀉縣第二區衆議院議員候補者略傳

市島謙吉君傳

君の家系は北越第一の豪封市島徳次郎氏に出づ祖父
俗海堂博士學徳望を以て猶更其名あり君幼より穎悟夙
に經世の志あり星野恆肥田野節諸儒の門に入り經史
を講讀す明治五年英學初めて地方に入り新瀉學校の
起るや君即ち更に英學を學び勵精勤勉す居る二年益
々志を奮勵し決然髪を負ふて東京に入り東京英語學
校に入りて修學すると又二年君の學業愈進む十年
開成學校の試験を行ふに際し君自ら信するの厚き直
に英語學校を辭し入學試験を受けて登第す人以此榮と
爲す後開成學校組織を革め東京大學と改稱し法理文
の三科を置くに及び君乃ち高田早苗天野爲之山田一
郎有賀長雄坪内雄藏の諸氏と文學科に入り修學數年

旗野餘太郎君傳

君は北浦原郡安田村の人天資穎達にして頗る才幹も
り夙に松溪離田翁に從ひ専ら和漢の學を修む翁は北
越儒林中別に旗幟を樹てしもの而して君が史眼の高
邁抱負の出群に感ず殆んど右位を避けたりと云ふ時
に王政維新に屬し世局一變せり是に於て乎君備さに
趨勢を察し奮然志を立て壬申の歲東京に入り尺振八
先生の共立學舎に師事し後其憤議塾を遊び大に泰
西の學を修む然るも君固より西洋崇拜者の亞流にあ
らず和漢の學常に兼修する所而して君世道の日に不
可なるを憂ひ時に名儒安井衡の門を叩き津を聞ひ益
を請ふ屢々なり是を以て同學の十咸君を爲めに一
頭地を避く然れども君固より小成自許するものにあ
らず尙ほ起て大學に入らんと欲し勵精刻苦頗る造
詣あり是時に方り劇書忽然北堂の病を報ずるや君謂
らく兒也能を負ひ郷を出でしより晨昏禮を廢し温湯

新瀉新聞號外 明治廿七年二月十五日

専ら經濟學を研鑽し大に勤む
なり靈魚と死生を共にするを
攻めず意の聘するに任せて大
方に漫遊し専ら實學を旨としし
隈伯職を辭して野に下る是時
瀨を極かんとす時に君文學科
從全科卒業するに際し自ら
の學びし文學士の贊稱吾に授
早くも政治に投ず國家の爲に
斷然意を決して大學を辭し小
進んで編輯に従事す越て十六
の有志者を糾合し高田新聞を
擴張す時 高田事件が政局
正利の筆鋒を以て政府の處

事を絶つ既 勳年焉ぞ知ん
ことを即ち急に行幸を治めて
病果然危殆に迫るす 後
を絶ち専ら父君を扶 家政
學を好む故を以て夙に 四
杖を我越に曳く者かす君を諷
す春濤鳴往松楸一六鹿門等諸
所なり若夫君が處事經世の要
畏服する有て一たび議員とな
議其弊を擧げ振奮す振肅し
至る又平素を理むるや精進
組洲を治め山野を して
益を永遠に期せざるはなし世
十嵐甚蕪等諸士と相謀り同志
新發田に設け大に改進黨の主義
助等我北越に來りしより以來所
り感に人心を轟動し尋て又後

發行所 新瀉市醫學町通一番町五十二番戸 新瀉新聞社
明治廿五年三月十日遞信省認可

吉君傳

素封市島徳次郎氏に出づ祖父
 實業に名あり君幼より穎悟夙
 肥田野節諸儒の門に入り經史
 初めて地方に入り新潟學校の
 を學び勵精勉勵す居る二年益
 負ふて東京に入り東京英語學
 又二年君の學業愈進む十年
 際し君自ら信するの厚き而
 試験を受けて登第す人以此榮と
 乃ち高田早苗天野爲之山田一
 誠氏と文學科に入り修學數年

専ら經濟學を研鑽し大に勤む然れども君素と學者と
 なり意氣と死生を共にするを欲せず故に章句の細を
 攻めず意の暢するに任せて大体を涉獵し閑あれば地
 方に湯遊し専ら實學を旨とし十四年丙午間島あり大
 隈伯職を辭して野に下る是時に當り政治の現象一激
 瀾を捲かんんとす時に君文學科第三年級を卒り一年の
 後全科を卒業するに際し自ら謂らく吾固と學者たる
 の學なし文學士の資格吾に於て何からや若かす
 早く政治の海に投身す國家の爲に仗す所ありとす
 斷然意を決して大學を辭し小野澤君等と共に憲政
 進歩の團體に從事す越て十六年郷國へ還り山頭城郡
 の有志者糾合し高田新聞を創刊し君 政治主義を
 擴張す時 高田新聞が局を設けす君即ち編輯典
 正金利の筆鋒を以て 政府の處世を批評し或は吏

言行を摘發論議して憚らず以て罪を言論に獲るに至
 りり偶々新聞條例の改正に遭ひ紙上署名の者若し犯
 を以て論ぜらるる故に其社長たるを以て罪を免るべ
 はず高田に新潟に長野に獄を轉する三所月を閱する
 八月君田獄の後京に入り東京專門學校の囑託を受け
 て政治科の講師となり有爲の學生を薫陶すると一年
 著す所政治原論世に行る十八年郷里の有志者に於て
 北越の面目なりと謂ふべし君夙に雄名を政治界に轟
 かす一躍して帝國議會に臨み其權の才略を顯はし
 天下赫赫の名を揚げんと期すべきなり

大郎君傳

人天資絶達にして頗る才幹あ
 ひ専ら和漢の學を修む翁は北
 へしてもの而して君が史眼の高
 んと右位を避けたりと云ふ時
 一變せり是に於て乎君備さに
 て壬申の歲東京に入り尺振八
 し後其慣業塾を遊び大に泰
 固より西洋學理者の亞流にあ
 る所而して君世道の日に不
 安井衝の門を叩き進んで益
 以て同學の十咸君を爲めに一
 回より小成自許するものにあ
 らんと欲し勵精刻苦頗ふる造
 忽然北堂の病を報ずるや君謂
 出でしより晨昏禮を廢し温湯

奉を絶つ既に數年焉を知らん恙母の病此に根せざる
 ことを即ち急に行幸を治めて歸る而して北堂の
 病果然危篤遂に逝かすして後 君是より更に念
 を絶ち専ら 父君を扶け 家政を理む然れども君眞性
 學を好む故を以て夙に 四方文士に結ぶ時の名流
 杖を我越に曳く者若し君を訪ひ詩酒を逞以て快とな
 す春鶯鳴雀松簷一六鹿門等諸君皆君に唱和酬酢する
 所なり若夫君が處事經世の要事なりは別人の尤も
 長服する者一たび議員となり國會に臨むや其論の
 議其弊を擧げ新術を振請し其才を冠とせしむるに
 至る又平素を理むるや其論を 的とし其弊を指す
 祖國を治め山野を治めて大に 増殖する等皆公
 益を永遠に期せざるはなし廿三年春二月市島謙吉五
 十嵐甚蕪等諸士と相謀り同志を糾合し以て一政社を
 新發田に設け大に改進の主義を唱ふ是より先板垣退
 助等我北越に來りしより以來所謂自由黨なるもの起
 り熾に人心を蠱惑し尋て又後藤象次郎大同團結を唱

ひ越の野に跋扈せんと欲す君此間に立ち慧眼能く其
 妄を看破し堅く守つて遂に屈せず鏡世道を扶植し
 人心を維持せ 郡内廣く改良進歩の道を知るに至れ
 るもの至竟君等豪傑の裡より出でしこと敢か又疑は
 らず看し多職二十日を以て 衆議院議員解散の事あ
 りしより以來十目を見る所す手は所なく君
 及市島君に属せり味亦嚴 重抑も我朝一たび立憲
 制度に改まりしより 爾降格々たる代議士大に政弊を
 發露し國水を進漸せしむるもの其功固より著しと雖
 も然るも上 至急の慮を煩はし下億兆の衷情を傷
 ましむるもの一にして足らず是れ舊代議士の治術未
 だ能ざる所知らず新代議士出るの日其政略果して
 奈何ぞや嗚呼 曠野君市島君左右提攜隨て院の中央に
 起ち風雲を叱咤して能く醜類を排除し毅然大に成す
 所あらば則日本政界の光輝萬丈高からん



發行所 新潟市醫學町通一番町五十二番戸 新潟新聞社 發行人兼印刷人 谷吉三郎 編輯人 石崎佐一郎
 明治廿五年三月十日遞信省認可